

「ほほえみの地域づくり」

の泣き笑い

～青い森のほほえみプロデュース活動奮闘記～

## 県事業からの独立 第8回

山本 菜穂子

### ＜県事業としての3年目＞

青森県職員庁内ベンチャー制度として当初2年間の計画で始まった事業は、多くの県民の賛同を得て（新聞の投書欄で褒めていただくことも何度となくあり）、「この取組を県は継続すべきです」というような投書も受けて、当時としては異例の「3年目継続」となりました。

この連載の2回目でも触れたように、2年間という期間は新規事業それ自体を形にするだけで精一杯で、それを根付かせるためにはもう一年欲しいということは、経験的に感じていましたので、「3年目継続」のお話はありがたいことでした。でも、

さすがに3年目はこれまでの2年間と違って、私の業務は「ほほえみだけ」とはならず、こどもみらい課の通常の業務も併せて受け持つ必要がありました。加えてこれまで一緒に進んできたほほえみ隊もバラバラになり、Kリーダーは課内に残ったものの課全体に目配りをしなければならぬ立場に変わり、SさんとOさんは別な部署に。そして第二期ほほえみ隊として新たに課内に私以外に2名の担当が誕生したものの、全員が他にも様々な業務を抱えながらという状態になりました。ということは、当然これまでの様に、全ての講習会に顔を出し、みんなの動きを把握し、きめ細かく目配りしようと思

ってもできないわけです。

でも、そのことが、その後県事業から独立していくための流れとしてとても良かったと思っています。もし、3年目も私がどっぷりと「ほほえみ」の仕事だけに没頭できるような環境であったら、私は当然ずっと「ほほえみ」を離さずに全身全霊をそこに注ぎ続けたでしょう。そして、3年目の終わりには「やっぱり今後県事業で続けないとダメだし、私が中心で動かないとダメだと思う。」と言っていた気がするのです。3年目継続するにあたって、財政課からは「県事業からの独立」という方向性について再度確認され、健康福祉部内の空気も「いつまで県がこの取組を持ち続けるのか。本来、県がやるべきことなのか。」という感覚が強まっていることも感じていました。

そこで3年目の事業計画の中には、仲間たちと共にNPO法人化について学ぶ研修を実施する経費も盛り込んでいました。ただ、3年目春段階で、私の中ではそれはまだ実感としては遠いものではありませんが。

さて、「親離れ、子離れ」の準備が始まりました。

## <県事業としての3年間>

コアと笑いのプロデューサーにとって、この3年がそれぞれどういう時期だったのかを整理してみたいと思います。

### 1 自分で学ぶための1年目

1年目はやはり「学び」の年だったと思います。

もちろん、「コア」や「笑い」として高柳先生から学ぶこともそうですが、高柳先生を離れて、「ほほえみプロデューサー」の養成に移っても、講習をしては反省会で語り合っただけで学び続けました。

ほほえみの大切さを伝えたい、その想いはたっぷりありましたが、まだまだ、何をどう話したらいいのか、と、自分のことで精一杯でした。

でも、その必死さが伝わって、この取組は広がり始めます。今後、他所でこのような取組をやりたいと思ってくださるところがあるとしたら、きっと一番難しいのは、形を真似しても、この「真剣な想い」「がむしゃらさ」を湧き上がらせることができるのかどうかということではないかと思っています。

### 2 仲間と、仲間を育てる2年目

「育てる」という意識が強く出てきたのが2年目だった気がします。後輩の笑プロデューサーを育てる、ほほえみプロデューサーを育てる。「育てる」意識は、私たちに自己研さんを積むというプラスの効果をもたらしました。

でも、時には一生懸命なあまり、議論が白熱して仲間同士傷つけあいそうになることもありました。そんな時、いつも誰かが「ほほえみの7か条に立ち返る」ことを口にして軌道修正してきました。そうしながら、講習を届ける側の自分たちが、ほほえみを実践し、仲間とのあたたかい

絆を参加者の前で体現できることが、参加者を笑顔にするための大きな力であることに徐々に徐々に気づいていきました。

自分が育ち、相手を育てる2年目でした。そして、仲間を増やし協力して活動することの心地よさ、その仲間との信頼関係が、私たち、コアと笑いのプロデューサーを強くつないでいきました。

### 3 参加者に感謝の3年目

3年目、私を含め中心になって活動を熱心に行ってくれていた仲間たちの中で「たとえ県の事業が終了しても、この活動を続けていきたい」との考えがはっきりしてきました。それは、こんな経験によってもたらされたと感じています。

講習会では、参加したほほえみプロデューサーの皆さんがたくさんのご感謝のことばをくれました。それ自体は1年目からのことですが、3年目、仲間たちから異口同音にこんな報告が寄せられるようになったのです。

「講師をしていると、自分が元気になる。」「助けられているのは、自分の方だと感じる。」と。この講習会で私たちは、ほんの少しでも誰かが笑顔にすることができ、誰かが元気になる手助けができていると感じます。実はそのことが、私たち自身に「私もまんざら悪くない」「ほんの少しでも誰かの役に立てている自分である」という自己肯定感を育て、私たち自身を元気にしてきたのです。

「人は誰かの役に立てたとき、自

分を肯定的にとらえられるようになり、自分に自信がもてるようになる。」それは、ほほえみの7か条の中でも伝えていますが、そのことが私たち自身に確実に起きていました。

そして、感謝を持ってこの講習を続けたいと思うようになっていったのです。

### <私のとまどいと決心>

そんな3年目を過ごしてきて、私も、県事業の終了とその後の道筋について本気で考える時が来たと感じていました。

そして、私は平成21年12月、ほほえみだよりV o 1. 10で次のように呼びかけることにしました。

#### 「来年度の活動について」

皆さん、ここは県職員の山本としてではなく、コア笑いプロデューサー個人山本として、今の想いを書きます。

この「青い森のほほえみプロデューサー」という取組を開始して半年後、徐々に仲間ができた頃、実は私は「とんでもないことを始めてしまったのではないか」と思い始めていました。これから先仲間を増やし、信頼関係を築き、活動を続ける。でも、県が事業を終了するとき、発案者としての私はみんなとの関係をどうするのだろうか。みんなを巻き込んでおいて、事業が終わることになりましたのでおしまいとなるのだろうか。これは私にとって「仕事」と割り切れるよ

うなものなのだろうか。もしかして、自分の一生を左右するようなどんでもないことを始めてしまったのではないかと、怖くもなりました。そのことにいずれ結論を出さなければならぬときが来るのだろうと思いつつ、その怖さを封印して過ごしてきました。

当初の事業期間2年が過ぎ、3年目も継続との声をもらいました。2年目までは私も講習に歩き回って、みんなが講師として安心して活動できるようにサポートしたいと思って、ただがむしゃらに進めてきました。そして、今年度、少し距離をおいてみんなの活動をみていると、講習の場で参加者から感謝され「自分が誰かの役に立てる幸せ」を実感し、自分が楽しいから参加者も楽しいという素敵な講習会が展開されていることを感じています。この活動を続けていけたらいいのに、そう思いました。

今回、NPOについて勉強する研修会を開きました。みんなの感想を見ました。多くの感想が「この活動を続けたい」と言っていました。そして、本当に素直に、「ここから先、どのような組織をつくり、どのように活動するかは、みんなで決めるんだ。」と思いました。私が肩に力を入れる必要もなく、NPOをつくるのが目的でもない。一人ひとりが自分の意志でどうしたいかを決めて、それを仲間と形にしていくことが必要だし、できるんだと、そう思えました。

そして、今回、コアの服部さんと中村さんが、「まず、みんなで話しをしてみよう！！」と声をあげてくれました。県は3月まででこの事業を終了します。さて、皆さんはどうしますか。今、どんな想いでいてくれますか。

### <「平成22年度からのほほえみプロデュース活動を提案する会」実施>

平成22年1月に、呼びかけたこの会に集まってくれたのは16名。そこでは、

- 来年度以降もこの取組を継続すること（NPOの形態はとらず、任意団体での活動とする）
- 各地区にマネージャーを決め、その人が講習会の申込受付等の拠点となる。
- 各地区のマネージャーの下にメンバーをおき、連絡網でつなぐ。
- メンバーや応援してくれる方(賛助会員)からの会費で、会の運営を行う。

ということ合意し、今後2月までに会の名称を決め、会則を考え、会員を募り、事業計画を作成し、3月には会を設立するというスケジュールで動くことを決定しました。

平成22年1月のほほえみだよりでは、こんな風に送っています。

今回のほほえみだよりは「来年度からのほほえみプロデュース活動を提案する会」からの重要なお知らせ

を掲載しています。資料もいろいろと同封しました。コア笑いプロデューサーの服部さんと中村さんから、新たな会を立ち上げる呼びかけです！県が主導しない新たなステージへ。ここからが本当のスタートのような気がします。「コア」と「笑い」と「ほほえみ」の力でどこまで何ができるでしょう。一緒にチャレンジしたい方、チャレンジを応援してくれる方、呼びかけに応じて会員登録をしてみませんか。

当初から講習会の動員に異論を唱え続けてきたのと同様に、ここでも、みんなの意向を曲げてまで、無理矢理に会を設立するようなことはしたくない。財政課から組織の立ち上げを言われたからでもなく、もちろん私の満足のためでもない。誰のために何をするのかをぶれさせないこと、そのことだけは意識していました。そして、平成22年3月22日「青い森のほほえみプロデュース推進協会」の設立に漕ぎ着けることになりました。

会長、副会長は、「提案する会」を主導してくれた服部さんと中村さんが担ってくれました。

## ＜設立趣意書＞

「寄り添ってほほえむことから始めよう」の温かなフレーズで始まった「青い森のほほえみプロデュース推進事業」、平成19年度から平成2

1年度にかけて、青森県が「ほほえみと笑い」による地域づくりを進めるという全国初の取組でした。

私たちは、青い森のほほえみプロデュース事業による講習会を経て、「コア笑いプロデューサー」や「笑いプロデューサー」として、青森県の取組の一翼を担い、ほほえみプロデューサーの講習会を通じ、多くの県民に「ほほえみ」と「笑い」の効果をお説き、体験していただき、温かなほほえみや笑いのある生活を送ってもらいたいと願い、そしてさらに青森県がほほえみと笑いに満ちた地域になってほしいとの希望を持って活動してきました。

青い森のほほえみプロデュース事業は、平成21年度をもって、青森県の事業としては終了することになりますが、私たちはその精神を忘れることなくこれを引継ぎ、県民に対しさらに広く、心からのほほえみや笑いを伝え、青森県という地域を私たちの力で変えていこうと決意しました。

そこで、私たちは、個々人の力を結集し、組織的にこの活動に取り組むべく、「青い森のほほえみプロデュース推進協会」を設立します。

## ＜さいごに＞

最初に「目指したい未来」と「そのための方法」を提示したのは、県でした。そして、その目標と一緒に目指して欲しいと県民に呼びかけ続

けました。そこから県と県民が一体となった取組がスタートしたのです。まさに「協働」でした。

平成25年5月、今、協会は年次総会を終え、4年目を迎えました。会員は約80名。講習の謝礼をお支払いいただけたところからは、協会への寄付として収入し、活動資金にあててきて、昨年度からは、やっと、私たちのフォローアップのために高柳先生を講師として呼び出せるくらいになりました。今年度は、是非、一般向けに高柳先生に講演をお願いしたいと計画しています。(12月1日(日)午前青森市内で開催の予定です。お近くの方、御希望のある方は、秋くらいからHPをチェックしてみてください。)

さあ、今年度も講習会の依頼が入ってきています。先日は、34、567人目の知事の記念カードを渡したところ。(この人数！また知事が楽しんでいる！)

県と県民が一体となって描いた未来。

「ほほえみあふれる、あたたかく、SOSの出しやすい、そして元気な青森県」

これからも楽しみつつ、細くても長く、この未来像の実現を願い、信じ、仲間と共にほほえみを広めていけることを強く願っています。

これで連載を閉じようと思います。放談にお付き合いくださった皆さん、ありがとうございました。

ほんの少しでも、皆さんが、想い

を形にするための勇気やヒントにつながっていたら嬉しく思います。

(ほほえんで♪) ありがとうございます。ありがとうございました。